GOZILA Study
試験にご参加いただいた皆さま、ありがとうございました！

GOZILA Study※1で調べたこと

手術で完全に取り除くことができない進行固形がん※2の患者さん4,037人 → リキッドバイオプシー※3 → 遺伝子変化の解析／治療 →
- がんの種類と遺伝子変化の関係
- 異常な変化の発現頻度
- 遺伝子変化に基づく治療の効果

※1　GOZILA study：正式名称は「結腸・直腸癌を含む消化器・腹部悪性腫瘍患者を対象としたリキッドバイオプシーに関する研究」
UMIN 試験ID：UMIN000029315

※2　固形がん：乳がん、肺がん、前立腺がん、大腸がんなど、かたまり状のがんのこと。血液がんは含みません。

※3　リキッドバイオプシー：がんが疑われる部位から細胞を直接採取する「組織生検」とは異なり、患者さんから採取した血液などの体液を用いて検査・診断する方法

がんゲノム医療の流れ 組織生検とリキッドバイオプシーの違い

がん患者さん → 従来の組織生検 → 遺伝子変化の解析 → がんゲノム医療 治療

組織生検の問題点
痛みや体への負担が大きい ／ 感染症や大量の出血などの危険性がある ／ 繰り返し検査することが難しい
組織を採取できない可能性がある ／ 過去の組織の場合、現時点の遺伝子情報が得られない
結果が出るまでに時間がかかる

がん患者さん → 採血（リキッドバイオプシー） → 遺伝子変化の解析 → 治療

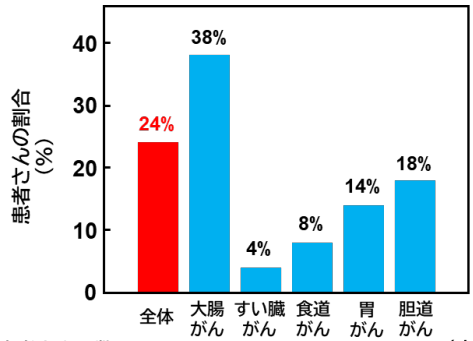
→ 組織生検の問題を解決 → 適切な治療をより多くの患者さんに！

GOZILA Studyでわかったこと

がんゲノム医療を受けることができた患者さんの割合は、従来の組織を採取する方法では10%前後*と報告されていましたが、今回のGOZILA Studyでは**24%まで増加**しました

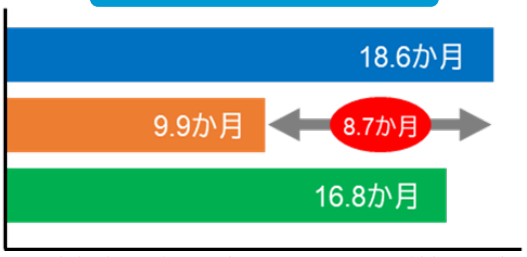
リキッドバイオプシーで見つかった遺伝子の変化に対応した治療を受けることで、生存期間が**約2倍まで長く**なりました

遺伝子の変化に対応した治療を受けた患者さんの割合



全体および患者さんの数が100人以上のがん種について示しています
※日本の報告では13.3%
（https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/cas.13969）

生存期間中央値※4



- 治療法に繋がる遺伝子の変化が見つかり、それに対応した治療を受けた患者さん
- 治療法に繋がる遺伝子の変化が見つかったが、それに対応した治療を受けられなかった患者さん
- 遺伝子検査をしたが、治療法がある遺伝子の変化が見つからなかった患者さん

※4　生存期間中央値：統計で使う言葉です。生存している人の割合が50%になるときのことをいいます。

より多くの患者さんに最適な治療を届けたく、私たちはリキッドバイオプシーという新しい技術を取り入れました。今回の研究結果をもとに、リキッドバイオプシーが世界中のがん患者さんに広く役立てられることが期待できます。

さらに詳しく知りたい

原著論文：https://www.nature.com/articles/s41591-024-03244-8
プレスリリース：https://www.ncc.go.jp/jp/information/pr_release/2024/0917_2/index.html
GOZILA Study HP：https://www.ncc.go.jp/html/scrum-japan/gozila-ppi/index.html

研究に関するお問い合わせ
国立がん研究センター東病院 SCRUM-Japan事務局
Eメール：scrum_office@east.ncc.go.jp

レイサマリー作成：メディカルグローン株式会社